

教師の指導力向上につながる校内研究支援の在り方

- 学校の主体的な校内研究に向けた伴走支援の工夫 -

主 幹・指導主事 櫻井 順矢	主 査・指導主事 平井 規夫
主 査・指導主事 坂本 久美	副主査・指導主事 古屋 雄人
副主査・指導主事 鈴木 高德	指導主事 一瀬 大樹

キーワード 授業改善 学級づくり 伴走支援 主体的

研究の概要

山梨県総合教育センターが学校訪問等を通じて校内研究を支援するセンター研究推進校「都留市立都留第一中学校」(以下、「推進校」という。)における教師の指導力向上につながる校内研究支援の在り方について、学校が自走し、主体的な校内研究となるための伴走支援の工夫について研究を行う。研究期間は2年間であり、1年目となる昨年度は、主として学級集団づくりに関する校内研究への支援を行った。2年目となる今年度は、1年目の研究を土台とした授業づくりに焦点を当てた校内研究に対し、支援を行った。

【研究主題】

教師の指導力向上につながる校内研究支援の在り方
- 学校の主体的な校内研究に向けた伴走支援の工夫 -

【研究推進校の研究主題】

他者と協働し、主体的に学びに向かう生徒の育成
- 協働できる集団づくりを通して -

主題設定の理由

各学校では、学校の特色を生かした校内研究を推進しているが、教育課題が多様化・複雑化する教育現場において、校内研究の運営に多くの学校が様々な悩みを抱えており、研究の成果が教員一人一人の授業改善につながっていないという現状がある。そこで本研究では、校内研究支援の在り方を探るにあたり、学校が抱える校内研究の運営に関する悩みに寄り添うための伴走支援はどうあるべきかという課題に着目し、伴走支援の工夫を通して、学校の主体的な校内研究の実現を目指すこととした。

研究の目的

推進校のニーズや実情を大切に、教員一人一人の授業改善につながる校内研究の実現を目指す本センターの研究支援が、推進校に対してどのような成果と課題をもたらしたかを検証し、校内研究の支援の在り方を探る。

また、教員一人一人の主体性の向上と授業改善につながる校内研究が、推進校を含めた多くの学校において実践できるよう、学校の特徴を生かした実践に寄与するとともに、事例の蓄積を通して、本センターのシンクタンク機能の充実を図る。

研究の方法

本研究の方法は以下のとおりである。

- ・研究主題を具現化するため、学習会、指導案検討、研究授業、研究会における指導助言の方法や内容についてチームで協議した上で実践する。
- ・日頃の授業の様子を参観し、校内研究の成果をどのように授業へフィードバックしているか情報を交換する。
- ・教師自身が変容を自覚し、見取るため、校内研振り返りアンケートを活用し、その記述とアンケートの結果を検証の手立てとする。

研究の経過

1 令和6年度の研究

推進校と情報交換を密にし、推進校のニーズや実情に応じた研究支援を行った。主な取組は次のとおりである。

- ・校内研究会リフレクションシートの活用
- ・Q-Uの結果分析に関する学習会
- ・指導案検討、研究授業(家庭科)の実施

成果としては、リフレクションシートにより振り返りをアウトプットして形に残すこと

や、Q-U学習会を通じた丁寧なQ-Uの結果分析により、推進校のニーズである、生徒同士が対話を行う上での土台づくり（安心安全なクラス環境・集団づくり）の意識を高めることができたことが挙げられる。

課題としては、これらの取組による土台の上での授業づくりや授業改善という点について、より多くの教科の授業においても授業研究を深めていく必要があったといえる。

2 令和7年度の研究

今年度の研究は、次の日程で実施した。

4月8日	都校内研究会	研究計画確認
4月9日	セクター研究	研究計画検討
5月13日	セクター研究	計画発表会
5月19日	セクター研究	連携・教育研究会
5月20日	都校内研究会	学級経営学習会
5月27日	都校内研究会	ICT学習会
6月18日	セクター研究	進捗状況確認等
6月19日	都臨時校内研究会	特別研究会
7月2日	都校内研究会	授業研究会
7月15日	セクター研究	進捗状況確認等
8月20日	都校内研究会	特別支援学習会
9月18日	セクター研究	中間発表会
9月30日	都校内研究会	授業研究会
10月14日	都校内研究会	事前研究会
10月20日	セクター研究	進捗状況確認
11月4日	都拡大校内研究会	（国語科）
11月13日	セクター研究	進捗状況確認
11月17日	セクター研究	連携・教育研究会
12月10日	セクター研究	進捗状況確認
1月14日	都校内研究会	進捗状況確認
1月22日	セクター研究	進捗状況確認
1月29日	セクター研究所内発表会	
2月3日	都校内研究会	研究の総括等
2月4日	セクター研究	研究大会・紀要
2月19日	セクター研究大会	
3月4日	セクター研究	次年度に向けて

研究支援の実際

本センターの機能を活用しながら、推進校の二

ーズや実情に応じた支援を行うため、基本的には、推進校で立てる研究計画を尊重した。具体的には、2つの取組を通じて支援を行った。

第1に、学習会の企画・運営への支援である。学校の実情に応じて必要となる教育課題に対して、本センター指導主事を派遣して実施した。

第2に、今年度の重点である授業づくりや授業改善に向けた取組への支援である。推進校で計画した、各学期に行う一人一実践の授業についての研究会に対し、山梨大学アドバイザーの教授や本センター指導主事を派遣して指導助言を行った。また、授業研究会におけるグループ討議の持ち方について、企画・運営に本センター指導主事も積極的に関わり、ICTの活用も含め継続的な研究支援を行った。

なお、授業づくりや授業改善に向けた取組の中では、11月4日の拡大校内研究会も含まれており、推進校の研究の成果を地域の学校、教職員に示す機会とした。拡大校内研究会では、国語科の研究授業について、協議の柱「主体的に学ぶ生徒の姿が見られたか」を設定し、生徒にとってあまり身近ではない短歌を題材に授業を構想・実践した。山梨大学アドバイザーである保坂伸客員教授と本センター指導主事が共同研究者の形で事前の授業づくりから当日の研究協議まで継続的な支援を行った。

以下、研究支援の実際について具体的に述べる。

1 学習会の企画・運営への支援

推進校では、昨年度の研究の成果や今年度の学校全体の実態を踏まえ、校内研修の場として、3つの学習会（学級づくり、ICT活用、特別支援教育）を計画し、校内研究計画に位置付けていた。学級づくりは、昨年度取り組んできた集団づくりについての継続研究ということでの位置付けである。ICT活用は、授業づくりを中心としていく上で、十分に活用が進んでいない学校の実態に対応しての位置付けである。特別支援教育は、令和7年度より推進校に通級指導教室が設置されることに伴い、学校職員の意識の向上を図りたいという学校長の意図を踏まえての位置付けである。さらに、総合教育センターが毎年6月に全県の教職員を対象に実施している特別研修会に、校内研究会としての参加を想定している臨時校内研究会を含め、4回

の学習会を実施した。

ここでは、各学習会についての実際と、全ての学習会が終わった9月に実施した「校内研究振り返りアンケート（15名回答）」における2つの質問について、4回の学習会ごと4段階評価により回答を得た結果を示すこととする。

【振り返りアンケートにおける2つの質問】

教師としての資質向上につながったか

明日以降の教育活動で活用していきたいか

(1) 学級づくりに関する学習会

昨年度からの継続研究ということで、推進校が主体となって企画・運営を行った。昨年同様、校内の学級経営に優れたK教諭とT教諭に講師となってもらい、実践紹介という形で5月20日に実施した。2名の教諭が作成した資料に基づき、講義型で研修が行われた。

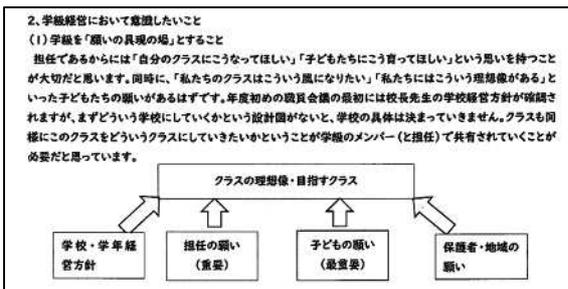


図 K教諭の資料(一部抜粋)

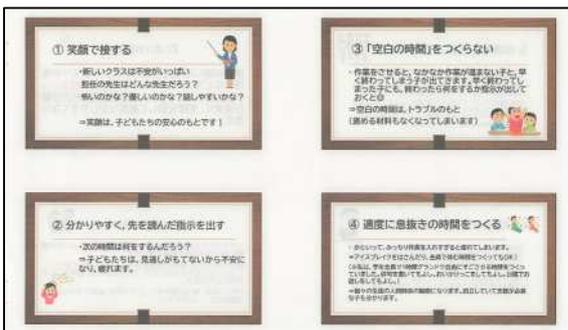


図 T教諭の資料(一部抜粋)

振り返りアンケートの結果は以下のとおり。

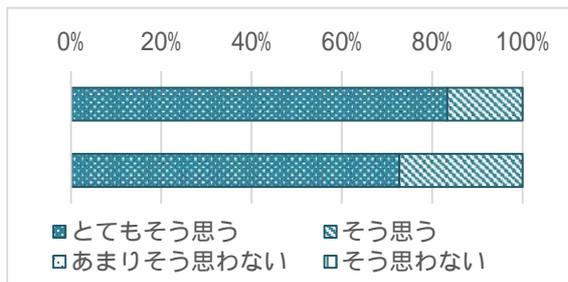


図 学級づくり学習会のアンケート結果

(2) ICT活用に関する学習会

推進校は、1人1台端末のOSがWindowsだが、標準ソフトであるMicrosoft Teams(以下、「Teams」という。)はほとんどの教員が使ったことがない状況であった。授業におけるICT活用の状況は十分ではなく、活用している教員も授業支援ソフトのみとなっていた。

そこで、本学習会の企画・運営への支援にあたり、総合教育センターICT教育支援センターにも相談する中で、標準ソフトであるTeamsを、まずは教員が使ってみることが大切であるという捉えから、同センターの指導主事を派遣し、Teamsの学習会を企画・運営した。



図 ICT活用に関する学習会の様子

振り返りアンケートの結果は以下のとおり。

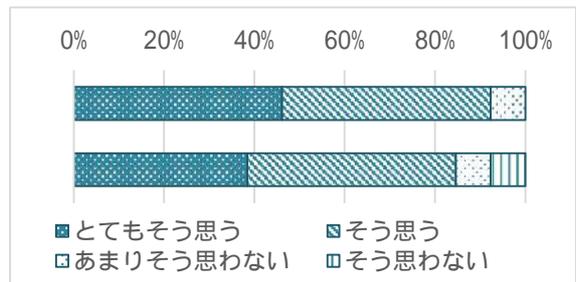


図 ICT活用に関する学習会のアンケート結果

(3) 特別研修会 への校内研究会としての参加

総合教育センターでは、毎年6月に全県の教職員を対象に、特別研修会を実施している。令和7年度は、熊本大学特任教授の前田康裕氏を講師に、「『子供主体』の授業づくりに向けた講師の学びと校内研のアップデート」をテーマにオンラインで実施した。個人だけでなく、校内研究会として学校ごとに参加でき、校内でグループを構成し、ワークの際はそのグループで対話する形で実施された。

推進校は、校内研究会として参加し、本センターから派遣した指導主事が支援を行った。



図 特別研修会 の様子

振り返りアンケートの結果は以下のとおり。

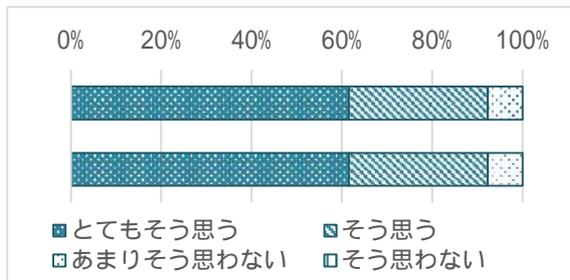


図 特別研修会 のアンケート結果

(4) 特別支援教育に関する学習会

令和7年度より、推進校に地域の学校を対象とする通級指導教室が設置された。推進校は、このことを教職員の特別支援教育に対する理解を深め意識を高めるよい機会と捉えていた。

そこで、本学習会の企画・運営への支援にあたり、総合教育センター相談支援センターにも相談する中で、多様な生徒の実態への合理的な配慮としての特別支援教育という視点が推進校のニーズに合致するという捉えから、同センターの指導主事を派遣し、通常学級における特別支援教育に関する学習会を企画・運営した。



図 特別支援教育に関する学習会の様子

振り返りアンケートの結果は以下のとおり。

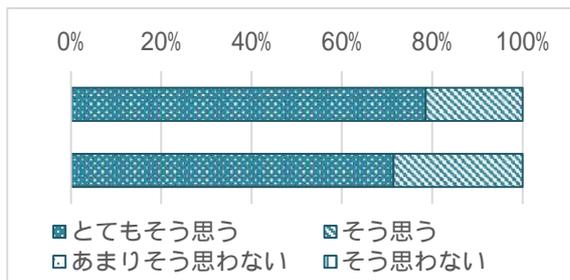


図 特別支援教育に関する学習会のアンケート結果

2 授業づくりや授業改善の取組への支援

推進校は、授業を受け持つ全教員が取り組む一人一実践をもとにした授業研究会を、7月、9月、1月の3回実施した。～ グループに授業者を割り振り、事前に公開したそれぞれの実践を互いに観察し合った上で、グループ討議による研究会を行った。

(1) 7月の授業研究会(グループの授業)

1回目の授業研究会の企画・運営は、推進校主導で行った。

- ・教科... 3年数学、2年理科、2・3年英語
- ・グループ...学年別：2年8人、3年7人
- ・討議方法...討議の柱は設定せず、付箋に生徒の様子と教師の工夫について記入後、付箋を見ながらグループ討議
- ・支援体制...指導主事が4名参加



図 授業研究会(グループ)の様子

参加した指導主事の報告を受け、中学校チームの研究会では、課題点を挙げ、次回の授業研究会に向けた支援の方向性について協議した。以下の課題と対応を推進校に伝えた。

- ・課題... 今回の協議方法は、考えを広げる点で一定の効果が見られたものの、議論の深まりが見られなかったこと
グループの人数が多く、意見の交流が十分とは言えなかったこと
- ・対応... 討議の柱を1つ設定すること
ICT(パドレット)を活用し、意見の交流の機会を保障すること

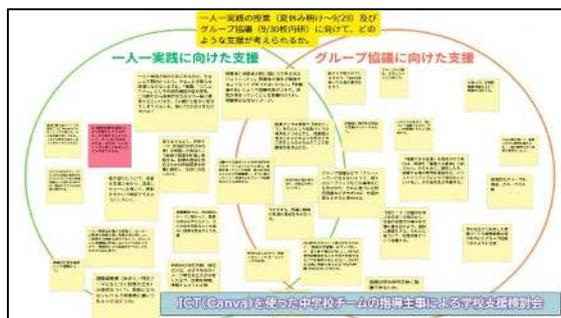


図 中学校チーム研究会での検討の様子

(2) 9月の授業研究会(グループの授業)

2回目の授業研究会の企画・運営は、前回を受けて、本センター主導で行った。具体的には、討議の柱を推進校の研究方針に合わせて、以下の2つを提示し、教科ごと授業者に選択するようにした。

柱1: 他者と協働する場面がどこにつくられ、
どんなよさがあったか(保健体育)

柱2: 主体的に学びに向かう生徒の姿が見られたか(数学、社会)

また、グループ討議の際、付箋の代わりにICT(パドレット)の使用を提案し、体験を通して学ぶ機会を保障するため、本センター指導主事が主導して行うこととした。

教科... 2年保健体育、3年社会、1年数学
グループ... 教科別: 保健体育5人、社会6人、
数学4人

討議方法... 討議の柱を各教科1つ設定し、
ICT(パドレット)を使って各自
で入力したものをもとに、柱に基づいてグループ討議

支援体制... 山梨大学アドバイザー1名と指導
主事が2名参加



図 授業研究会(グループ)の様子



図 ICT(パドレット)に入力した画面の様子

本授業研究会後にも、先述の学習会後の「校内研究振り返りアンケート」と同様のアンケート

トを実施した。アンケートには13名から回答があり、結果は以下のとおり。

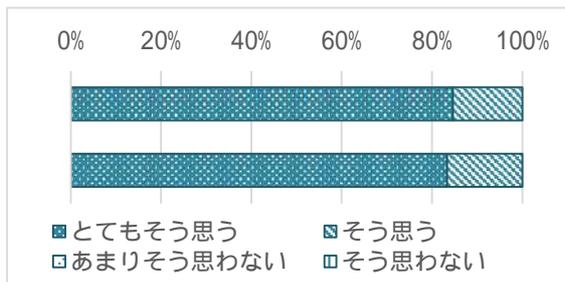


図 ICTを使った授業研究会後のアンケート結果

(3) 11月の拡大校内研究会(国語科授業)

拡大校内研究会に向けて、3年国語科の公開授業を実施し、山梨大学アドバイザーである保坂伸客員教授を指導助言者に招聘して、ICT(パドレット)を使ったグループ討議による授業研究会を実施する計画を立てた。

なお、拡大校内研究会の実施に係る案内通知や参加募集といった事務的な手続きは、本センターが全面的に支援した。

ア 事前研究会(指導案検討会)

推進校は、拡大校内研究会に向けて、1か月前である10月の校内研究会を事前研究会と位置付け、指導案検討会を計画した。

本センターによる研究支援は、次のとおり。山梨大学保坂伸客員教授を事前研究会に招聘保坂教授による指導助言の音声記録及び学習指導案のPDFを、生成AI(NotebookLM)に読み込ませて作成したレポートを、保坂教授に確認いただいた上で、推進校内のみで共有する資料として提供

本センター国語科指導主事による授業観察及び指導案作成支援

事前検討会で使うICT(パドレット)の準備

イ 拡大校内研究会(国語科研究授業)

推進校職員を含め、南都留地区内小中学校から約40名の参加があった。参加者に対して拡大校内研究会に関する各種情報を提供する方法としてポータルサイトを作成した。



図 ポータルサイトの画面

授業の実際

・日時

令和7年11月4日(火) 5校時

・対象クラス

3年1組

・教科・内容

国語「君待つと - 万葉・古今・新古今」
〔C 読むこと (1)ウ〕

・本時のねらい

現代語で和歌を書き直す活動を通して、和歌の表現の仕方を評価しよう

・本実践に対する授業者の課題意識

授業者は、和歌は、生徒にとって身近ではなく、受け身になりがちであることから、主体的に学びに向かう生徒の姿を引き出したいと考えていた。

・課題意識に対する授業の手立て

教師がモデルを示す際に、生徒がよく知る話題を用いたこと

生徒に5つの和歌から1つを選ばせる場面を設定したこと

同じ和歌を選んだ生徒同士のグループによる対話を取り入れたこと



図 拡大校内研究会での授業の様子

研究会の実際

・討議の柱

授業者の意図に沿い、「主体的に学びに向かう生徒の姿が見られたか」を設定

・方法

6つのグループを編成し、本センター指導主事が、全体及び各グループでファシリテートした。授業後に、推進校の職員を含む参観者が、ICT(パドレット)に討議の柱に関わる気づきやその他の気づきを入力し、それをもとにグループ討議を行った。

討議の記録は、グループごとにICT(パド

レット)に入力し、他者参照できるようにした。

以下は、ICT(パドレット)に入力された内容より抜粋したものである。(下線は筆者)

【討議の柱に関する気づき】

- ・生徒が個々に和歌の解釈をしていたのはすごいと思った。一人の生徒の考えを全体に共有できるタイミングがあれば一つの和歌であっても多様性を感じることができたのではないか、思考の過程を学ぶきっかけになったのではないかと考えます。
- ・クラス内の関係性がとても良く構築されているので多様な和歌の面白さをクラス全体で共有できる雰囲気を持ったクラスだと思いました。
- ・選んだ短歌からイメージを膨らませ、そのイメージにあった言葉を探していた。
- ・生徒が知っている内容を使ったことで自分たちもできるんじゃないかという気持ちになったのではないかと。
- ・生徒たちは、自分の選んだ和歌をどんな言葉で言い換えればよいか考えて取り組んでいたし、三十一字に凝縮された想いを自分なりに汲み取ろうとしていた。

【あるグループの討議の記録】

○主体的な部分

- ・和歌自体は難しいが和歌の解釈や読み方を前時まで学習されている。各々が異なった解釈から短歌をつくれていた。みんなに共有できると、さらに学びが深まるのではないかと。
- ・それぞれの解釈を聞いた後、一人がまとめて、「この言葉もつとないかな」と問いかけていた。
グループの中だけだともったいない。
- ・現代語訳が教科書に載っているので、自分なりの解釈と教科書を比較すると、考えをより深められた。

○授業後半の対話の部分

- ・教師と生徒との対話の中で、理解が全体で深まる活動となっていた。

- ・個人で考えた後、グループに分かれる前に全体で共有することで、自身の間違いや他者のいいところに気づくことができたのではないか。
- ・「ひとつの言葉から色んな解釈ができた」という発言に対して、「具体的にどんな言葉？」と聞き返すことで、一つの発言からみんなの気づきに繋がる対話になったのではないか。

ICT（パドレット）に入力された、「多様な和歌の面白さをクラス全体で共有できる雰囲気を持ったクラスだと思いました」、「教師と生徒との対話の中で、理解が全体で深まる活動となっていた」という記述から、昨年度の推進校で力を入れてきた集団づくりの成果が土台となっていたことが推察される。

また、「一人の生徒の考えを全体に共有できるタイミングがあれば一つの和歌であっても多様性を感じることができたのではないか」、「『ひとつの言葉から色んな解釈ができた』という発言に対して、『具体的にどんな言葉？』と聞き返すことで、一つの発言からみんなの気づきに繋がる対話になったのではないか」という記述から、グループでの対話に一定の効果を認めつつも、さらに学びの質を高めるための手立ての可能性が指摘されていることが推察される。

さらに、「現代語訳が教科書に載っているので、自分なりの解釈と教科書を比較すると、考えをより深められた」という記述からは、他者との対話や教師の介入以外に、教科書を活用した確かな解釈の可能性が指摘されていることが推察される。

・指導助言から得られた示唆

授業実践及びグループ討議での議論を経て、指導助言者である山梨大学アドバイザーの保坂伸客員教授より、主に次の3点について助言があった。

効果的な協働を可能にする具体的なスキルを教師が意図的に育成すること。ここでは、「形成」（例：参加を促す、意見を明確化する）、「機能」（例：時間管理と進行、軌道修正）、「定着」（例：要約、合意形成）の3つのスキルが示された。

古典の世界に親しむことの重要性。音読を活用することや現代との接続について考えさせることで親しむことができるようにすること。また、基本的な知識・技能の適切な指導の重要性も確認された。グループ編成の重要性。適切な人数と柔軟



図 ICT（パドレット）に入力した画面の様子

な運用が必要で、生徒がそれを判断できるようになることが理想であることも示された。

・参加者アンケートより

推進校以外からの参加者に対するアンケート（回答10名）の「本日の授業では、生徒にとって身近ではない短歌に対して、主体的に取り組み、他と協働して学ぶ姿の実現を目指して授業を構想しました。本日参観された授業を観る中で、そのような生徒の姿が実現できたと思いますか？」という質問についての結果は、次のとおり。

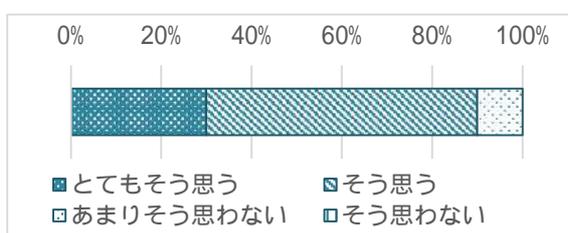


図 拡大校内研究会の参加者アンケート結果（抜粋）

また、意見・感想の記述式回答では、10名中4名の参加者から、次のような、授業をした学級集団における生徒同士の関係、生徒と教師の関係についての肯定的な内容が見られた。昨年度、推進校が取り組み、本センターが支援してきた集団づくりに関する研究の成果が、本時の授業の土台となっていることが推察される。

- ・生徒との関係が築かれた状況で授業が展開されたことで、より学習に対する意欲が高まっていて素晴らしいと思いました。
- ・生徒との人間関係づくりがしっかりできていて良かったです。
- ・クラスの雰囲気もよく、協働学習や自分の意見を表現する下地がしっかりとできていた。
- ・参観したクラスの子もたちの様子はとても温かみがあり開放的でよかったです。日常の先生方の指導や人間関係づくりの積み重ねがうかがわれます。

・拡大校内研究会の振り返りへの生成AIの活用
拡大校内研究会においても音声記録等を、生成AI(NotebookLM)に読み込ませてレポートを作

成し、推進校内のみで共有する資料として提供する支援を試みた。提供したものは2種類あり、第1に、6つのグループ討議の音声記録及びICT（パドレット）の入力内容のPDFを読み込ませて作成したレポートである。第2に、保坂教授による指導助言の音声記録及び学習指導案のPDFを読み込ませて作成したレポートである。なお、提供したものは、保坂教授に確認いただいたものである。

この生成AI(NotebookLM)を活用した取組については、これを基に研究をさらに深めることが重要である。その点で、資料提供にとどまったことは、今後の課題としたい。

（4）1月の授業研究会（グループの授業）

3回目の授業研究会の企画・運営は、9月の授業研究会と11月の拡大校内研究会を受けて、学校主導で行った。具体的には、討議の柱を設定し、ICT（パドレット）の準備、当日の運営までを、本センターの支援なしで行った。

教授を指導助言者に招聘して、ICT（パドレット）を使ったグループ討議による授業研究会を実施する計画を立てた。

教科... 1年理科（初任者） 1年保健体育、
1年技術・家庭（家庭分野）
グループ...教科別：理科7人、保健体育5人、
技術・家庭（家庭分野）5人

討議方法...討議の柱を以下の2つから各教科1つ設定、ICT（パドレット）を使って各自で入力したものをもとに、柱に基づいてグループ討議

支援体制...山梨大学アドバイザー1名と指導主事が2名参加



図 授業研究会（グループ）の様子



図 ICT（パドレット）に入力した画面の様子

推進校は、7月のグループ討議では、付箋を使い、討議の柱を設定せずに自由に対話をしてきた。しかし、9月、11月のグループ討議において、本センター主導によるICT（パドレット）を使った討議の柱に基づく対話を経験したことを生かし、1月には、推進校主導でICT（パドレット）を使った討議の柱に基づく対話による授業研究会を企画・運営することができた。これは、学校主体の取組による校内研究の質の向上と解釈することができる。

研究のまとめ

1 教師（学校）の自走を促す伴走支援

教師の学びは子供の学びの相似形という考えに基づけば、学びの状況を見取る評価の観点は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」ということになる。本センターの役割は、学校の伴走支援であり、いずれは自走できるようにすることである。

そこで、重視すべきは、「主体的に学習に取り組む態度」である。この観点は、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等の育成に向けた粘り強い取組を行おうという側面と、その中で自らの学びを調整しようとする側面がある。

本センターとして、伴走支援を通して教師の自走を促すのであれば、まず、教師の校内研に対するモチベーション（主体的に学習に取り組む態度につながる第一歩）の向上を目指し、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等の育成に向かうようにすることが大切だと考える。その意味で、指導主事による継続的で柔軟な学校への関わりを心がけた。

教師の知識及び技能や思考力、判断力、表現力等の育成については、学習会や指導助言を通して促すとともに、校内研の進め方（方法知）を、経験を通して学んでもらうことが重要であると考え。その意味で、校内研究会運営への指導主事の積極的な関わりを心がけた。

2 校内研究へのモチベーションの向上

12月に、次のような、2年間の推進校の取組の振り返りアンケートを実施し、推進校の教職員17名の回答を得た。

- ・校内研究へのモチベーションの高さを、4段階（とても高い・やや高め・やや低め・とても低い）で自己評価
- ・令和6年度について、1学期、夏季休業日から2学期まで、3学期の3つの期間に分けて質問し、回答を得た。
- ・令和7年度について、1学期、夏季休業日から10月まで、11月以降の3つの期間に分けて質問し、回答を得た。
- ・令和7年度に推進校に赴任した教職員は、～は在籍なしとして集計した。
- ・さらに、モチベーション向上のきっかけとなった本センター指導主事の関わりについての質問に対し、記述式で回答を得た。

アンケートの結果をグラフにまとめたものが次のとおりである。上記の6つの期間を、それぞれ帯グラフにして、下から～の順に並べており、在籍なしもグレーで示した。

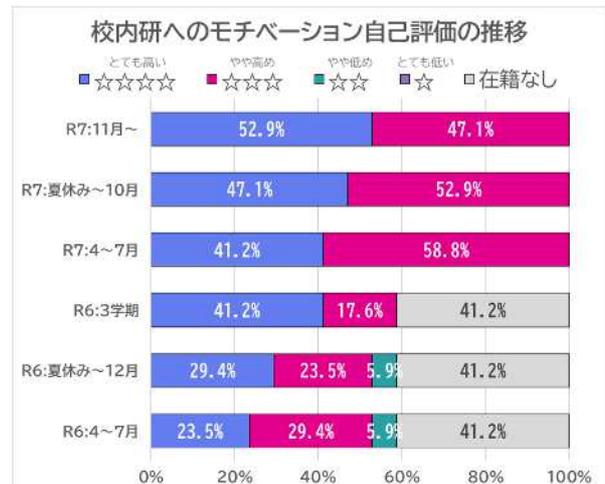


図 2年間の取組振り返りアンケートの結果

結果として、2年間を通じてモチベーションの向上が見られた。この要因の大部分は、推進校が、学校長を中心として全教職員で取り組んだ成果であると考えられる。

一方で、年度が変わってもモチベーションが常に向上する傾向が見られる点は、2年間の継続的な伴走支援の成果と解釈することもできる。

また、モチベーション向上のきっかけの回答で多く見られたキーワードは、次のとおりである。

- ・Q-Uを活用した集団づくりの学習会
- ・学校の意向に沿った支援
- ・Teamsの学習会
- ・6/19特別研修会での学び
- ・通常学級の特別支援教育の学習会
- ・パドレットなどのICTの活用
- ・いろんな方との対話

2年間の研究支援において実施した取組や働きかけ（推進校の要望に応じた学習会、学校の意向に沿った支援、ICTの活用、様々な対話）についての記述が見られたことから、推進校の実態に合わせた、学習会等のような新たな刺激、そして、伴走支援を通じて構築された、本センターと推進校との対話的關係に、一定の効果が見られたと考えられる。

3 方法知としての校内研究へのICT活用

本研究では、校内研究会にICT（パドレット）の活用を取り入れた。そして、それを取り入れる際には、まず、指導主事がICT（パドレット）を活用した校内研究会を企画・運営した。推進校がそれに参加して経験することを通して、そのノウハウを学ぶ機会を設定するためである。結果として、学校主体の取組による校内研究の質の向上につながったことは、校内研の方法知として、一定の効果があつたと考えられる。

また、拡大校内研究会等において、音声記録等を、生成AI (NotebookLM) に読み込ませてレポートを作成し、推進校内のみで共有する資料として提供する支援を試みた。しかし、生成AIで作成したレポートを基に、研究をさらに深めることが重要であるという点で、資料提供にとどまったことは

課題である。今後、さらに研究を深め、研究支援の効果的な取組として確立していきたい。

【研究推進校】

都留市立都留第一中学校 校長 岩澤 宏行

【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 河西美代司

山梨大学 客員教授 保坂 伸

山梨大学 教授 萩原 佳子

【総合教育センター 研究アドバイザー】

次長(義務) 重田 誠

業務推進(主任) 伊藤 毅